

た硬い材にするために、成長を抑制するためと聞いている。」

H「そういえば、松などは、やせた土地の方が良い。肥えていると、他の植物が茂って、松が負けてしまう。」

E M

I「EMなどはどうだろう。」

司会「EM(イフェクティブ・マイクロ・オーガニックス、有用微生物)の略で、EMぼかしのより純粋なものと思えばよいと思う。今年度は、予算をつけて、テストすることになっている。本当は、松くい虫で弱っている松の再生に試したいが、もちろん桜にもテストする。」

H「HB 101というのがある。植物の成長剤だが、これも試して見たい。」

K「テストの対象を決めて、いろんな種類の施肥をしたものと、何もしないものとの間で、成長の差を比較できるように、計画する必要がある。」

深坂の松

司会「深坂の松が、松くい虫の被害にあっている。何とか助けられないか。松葉や、草を取り除いて、清潔な痩せ地に保つ必要がある。」

H「北九州に新友の会と

たついでにいうと、深坂ではau以外のケイタイは入らない。docomoやソフトバンクもつながらずに働かせて欲しい。」

植物(続き)

K「こんなのがありますよと紹介したら、角島ではダルマ菊が沢山持つて帰られたと言う話がある。」

S「川棚の楠の森ではエビネが盗掘にあった。そういう例はたくさんある。」

I「そういうケースもあるが、モラルの向上をはかり、植物に関心の薄い人たちの関心を高める方を重んじたい。」

Y夫人「深坂にはどれくらい珍しい植物があるのですか？」

H「それほど珍しいものはないかも知れないが、この間のフコノハナワラビなどは値段がつかます。」

司会「監視カメラをつけたらという考えもあるが、監視カメラごとを盗まれるということもある。」

K「話しは変わるが、頻繁に草刈りしていると、植物の生態系が変わるんじゃないですか？」

H「それは変わります。」

K「黄色いツワブキの花をよく見かけるようになったのは、草刈するからじゃないですか？」

I「プを持っていてる人たちがいる。」

N「先日、深坂で、枯れ枝の集積所に車で集めに来ていた人がいた。家には薪の暖炉があるとのことだった。チラシを上げたら、そんな会があるならぜひ入りたいといわれた。」

I「チラシを森の家や、竜王山の登山道の入り口などに、箱を作って入れておいたらどうだろう。」

S「サンデー下関などに、広告を載せてくれないだろうか？」

Y夫人「野鳥の観察会があったので、そこに申し込みをしていたら、関連のボランティア団体から、勧誘がきた。さくら友の会も野鳥の観察会を開いたらいいですね。」

N「他のNPOとの交流も課題だから、ちようど良い機会ですね。」

会員増強アイディア

Y「野鳥観察、薪友の会、野草観察、桜観察ウォーキングなど、草刈のない月に企画するといいいですね。」

K「昼飯を少し豪華にする。」

司会「いや、いつもの豚汁と握り飯おいしいですよ。」

I「深坂に描くあなたの

H「そうだと思います。ツワブキは海岸から十キロ以内でないと見かけません。」

N「そうですね。内陸で育ったわたしは安岡に来るまでツワブキを見たことがありませんでした。」

Y夫人「さくら新聞に植物を紹介していったらいい。」

H「簡単なものでいいですね。そして、作業前に配ると良いですね。そうすれば、その日の作業中に、発見できるかもしれない。しかし、年季が入らんとだめですね。前もってどんな植物が咲いているか知っておかねばならない。」

司会「それはできないことはない。去年の今頃咲いていた花を2、3紹介すればいい。」

夢を、一般から公募すればよい。」

一同「そうですね。」

Y夫人「アンケートを募集したらどうでしょう。」

植物探査ウォーキング、野鳥観察、などどんなものが好まれるか。」

深坂のキャンプ場

I「深坂のキャンプ場はどれ位利用されているのですかね？」

K「結構利用されているようです。」

データの記録と分析

I「桜の枯れたのを記録しないといけないですね。」

司会「成功例だけでなく失敗の例も集めて記録分析しなければならい。」

K「系統的にしなければならぬ。モデル地区を作り、目標を決めて、もっと綿密に計画をして、毎年一貫した方針でいかねばならない。」



新春座談会

S「しかし、今は、思いつきでやるのが流行だからね。」

司会「ア、ソウ(笑い)会の名前はここのまま？」

H「今の名前だとさくらオーナーが桜の世話をする会という印象がある。オーナー以外の方々が参加するためには、名前を変えることも視野に入れておく必要はないか？」

N「今度、NPO法人化して、桜以外のことも明確になったので、これからその点を強調することになっています。」

K「桜にこだわる会員もいるのだから、それはそれで良いのではないだろうか？」

司会「いろいろなことをしても、始まりは桜だったのだから、名前はそのままが良いと思うし、変えるにしても今のことでなくてずっと先のことでしょ

う。」

ピオトープ

H「深坂バイパスを内日に抜けるところにあるピオトープを復活できないか？」

S「内日の水源地に行く手前は、元は水があつて葦が生えていて、水を清浄化する能力があつたが、住民の農家から苦情が出て、水道局が年に二回草刈をしている。」

司会「農家の苦情は何のため？」

S「イノシシが来て暴れまくる。体についた虫を取り除くために、土浴して体を葦などに擦り付ける。」

司会「イノシシの風呂ですね。」

H「水があると、キンランとかギンランが育ちやすい。以前にはあつたのだが消えてしまった。」

K「復活できないですかね。」

H「蘭は菌細菌との共生だから、移植してもなかなかつかない。」

司会「現地の農家とも話し合いたいですね。蘭の復活にも挑戦したいですね。」

話はまだまだ尽きないようですが、大分時間をオーバーしました。機会があったら、また語り合いたいと思います。本日は本当にありがとうございました。」

座談会出席者

和泉昭夫 桜の手入れに超熱心。倒れた桜の代りにH一七年に植えた木が、もう十一年の平均に迫いついてきているのが自慢。

城戸哲郎 会員交流部会長、他いろいろ業務、今度の吉野研修ツアーの企画も同氏によるもの。

下川勇作 維持管理部会で深坂の桜の管理の地図他、データの管理を一手に担当。

西川浩子 事務局局長で一切の事務を担当。その電話応対の柔らかさに魅せられて会員になった人もいる。

野口周三 広報部長だが、記者兼、カメラマン兼編集長。さくら通信、新聞の影の発行者。

平野正 深坂はもとより自然の愛好家。植物に造詣が深く、山桜の礼賛者。大陸から引き上げて日本の山桜を初めて見た記憶が原点。

山田一之、澄江夫妻 夫婦で会員交流部会で活躍。自然を愛する活動なら他の団体の活動にも、いつも夫婦で参加。

司会「本日はお忙しいところをお集まり頂きありがとうございます。」

植物

司会「ピフォーアフターというTVの番組がありますね。あれをもじってプレゼント&フューチャーとしました。深坂の森や「さくら友の会」の活動について、将来どうしたいという思いや夢を語り合いたいと思います。人間には、夢を描く能力が神から与えられているので、それを自由に存分に発揮してください。よろしくお願ひします。」

Y「深坂の森の珍しい植物に立て札をつけて紹介したらいいですね。」

S「写真を撮って森の家に展示して紹介したいですね。」

I「珍しい植物だけに限らず、植物の群落を育て、ゼニのかからない、小さいネームプレートをつけたら良いと思う。」

司会「現場にラベルというのでも良いですが、QRコードを現場に貼り付けておき、ケイタイ電話で読み取って表示されるようにしたいと思ってい

ます。」

Y「ケイタイの話が出たついでにいうと、深坂ではau以外のケイタイは入らない。docomoやソフトバンクもつながらずに働かせて欲しい。」

植物(続き)

K「こんなのがありますよと紹介したら、角島ではダルマ菊が沢山持つて帰られたと言う話がある。」

S「川棚の楠の森ではエビネが盗掘にあった。そういう例はたくさんある。」

I「そういうケースもあるが、モラルの向上をはかり、植物に関心の薄い人たちの関心を高める方を重んじたい。」

Y夫人「深坂にはどれくらい珍しい植物があるのですか？」

H「それほど珍しいものはないかも知れないが、この間のフコノハナワラビなどは値段がつかます。」

司会「監視カメラをつけたらという考えもあるが、監視カメラごとを盗まれるということもある。」

K「話しは変わるが、頻繁に草刈りしていると、植物の生態系が変わるんじゃないですか？」

H「それは変わります。」

K「黄色いツワブキの花をよく見かけるようになったのは、草刈するからじゃないですか？」

H「そうだと思います。ツワブキは海岸から十キロ以内でないと見かけません。」

N「そうですね。内陸で育ったわたしは安岡に来るまでツワブキを見たことがありませんでした。」

Y夫人「さくら新聞に植物を紹介していったらいい。」

H「簡単なものでいいですね。そして、作業前に配ると良いですね。そうすれば、その日の作業中に、発見できるかもしれない。しかし、年季が入らんとだめですね。前もってどんな植物が咲いているか知っておかねばならない。」

司会「それはできないことはない。去年の今頃咲いていた花を2、3紹介すればいい。」

桜

I「桜を堰堤に植えてはいけないのですかね。」

S「それはだめですね。風が吹いて木を揺らすと、堤が傷んで決壊する恐れが出る。」

Y夫人「もう、桜を植える場所はないのですか。」

N「見晴台は植えても良いのですが、場所が高いので嫌われる。もみじ谷でさえ、『あげな所に植えてから』とずいぶんお叱りを受けました。」

S「植えても、水を運ぶのが大変。」

H「実生で育てたらどうだろう。」

K「着床率はどれくらいですか？」

H「芽が出るまで、たくさん蒔いておけばよい。」

司会「家で、ポットに蒔いて芽を出させたらどうだろう。植えるのはポット

ことでよい。」

S「この頃は、そのまま植えられるポットがある。」

Y夫人「見晴台には、どれ位の本数が植えられるのですか？」

N「原っぱには植えられないでしょう。原っぱを取り囲むように周囲に植えると四、五十本くらい？」

司会「原っぱの部分にも、一〇、二〇mぐらいの広い間隔なら良いのではないか。広場に行っても綺麗、遠くから山を見ても綺麗なようにデザインしなければならぬ。」

S「竜王山の登山道のほうまで植えれば百本や二百本いけるのではないか。」

I「下の方は下界が見晴らせるように植えないほうが良い。」

H「北九州の白野江植物公園をご存知だろうか？深坂の森には、もつといろいろな種類の桜を植えたい。今咲いている十月桜、河津桜、寒緋桜、桜餅の葉を取る八重桜など。山桜の場合は木も太くなるのが早い。」

N「去年から、少し種類を増やしている。山桜、大島桜も植えました。」

K「しかし、実生では

オーナー桜というわけにはいかないでしょう。友の会で植えましょう。」

司会「少し成長してきてからオーナー募集すればよい。」

施肥

I「話しは変わるが、私の桜は平成一一年に植えたのが三本あつて、非常に成長が良かったが二本が風で倒れた。平成一七年、それを新しい苗に植え替えたが、もう他の桜に追いついてきている。肥料は、ほんの少しだが堆肥とか牛糞などをやっているからだと思う。」

司会「しかし、成長が良すぎると、根の張り方に比べて、地上部分の幹が大きくなり風で倒れ易くなりませんか？」

H「それはないだろう。根も大きくなるだろう。」

司会「土壌が肥えていると、根が大きくなっても必要な栄養分が吸収できるから、起こり得ると思う。」

H「なるほど」

司会「白川杉を見たが、地上部分は、高いところに少し枝を残して、低いところは枝打ちしてある。それは、年輪の詰つ